

創立 90 周年企画「郷土の高校！ 古仁屋高校のあゆみ」について

古仁屋高等学校 教頭 吉井 秀一郎

1 はじめに

鹿児島県立古仁屋高等学校は令和 2 年度に創立 90 周年記念関連行事を実施する計画であったが、新型コロナウイルス感染症対策のための見直しを余儀なくされ、延期及び自粛の対応を行った。

そこで、10 年後に創立百周年を控えていることもあり、分かりやすく校史を振り返り、これまでの歩みを踏まえて古仁屋高校の将来について考える機会となればと思い、『古高だより』（月刊）に「創立 90 周年企画「郷土の高校！ 古仁屋高校のあゆみ」」を当時の写真資料を添付して連載することとした。令和 2 年 6 月号から令和 3 年 3 月号まで連載した。

『古高だより』は瀬戸内町が刊行（月刊）する『広報せとうち』にも毎号掲載されているので、本校が立地する瀬戸内町民及び関係者へ本校の現在の様子を伝える役割も担っている。

2 校史概要

本校は昭和 5 (1930) 年に『大島郡東方村立古仁屋家政女学校』としてスタートした創立 91 周年を迎える普通科の高校である。以後、昭和 14 (1939) 年に『鹿児島県古仁屋実科高等女学校』、昭和 18 (1943) 年に『鹿児島県古仁屋高等女学校』へと学校改編に伴い校名を変更してきた。

さらに、戦後間もない昭和 22 (1947) 年に鹿児島県古仁屋高等女学校と古仁屋町立青年学校が合併し『古仁屋町実業高等学校』が誕生し、現在地（奄美大島要塞司令部跡）に移転したが、昭和 24 (1949) 年に「名瀬の高校への進学は負担が大きすぎる。是非地元の新制高等学校設立を」という地域の強い願いがあり『瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校』の設立が決まった。

当時の奄美群島は米軍の統治下にあり、設置者も古仁屋町・西方村・実久村・鎮西村・宇検村から成る「古仁屋町外四ヵ村瀬戸内学校組合」から「臨時北部南西諸島政庁」、「奄美群島政府」と変わり、昭和 28 (1953) 年 12 月 25 日に日本復帰が成ると、「鹿児島県」を設置者とする『鹿児島県立古仁屋高等学校』が誕生した。

令和 3 年 12 月現在、100 名の生徒が在籍しており、25 名が県外の中学校の出身者である。その中の 23 名が地域みらい留学生であり、全校生徒の 2 割を超えている。

4 参考資料等

参考文献として各周年記念事業実行委員会等が「周年記念」を冠して刊行した冊子の中から、校史を紐解く上で重要と思われる写真が数多く掲載されている創立 50 周年（昭和 55 (1980) 年）号と創立 70 周年（平成 12 (2000) 年）号及び『瀬戸内町誌 歴史編』（2007 年 瀬戸内町誌歴史編編纂委員会）を主な参考資料とし、併せて校舎や植樹の様子が分かる写真を卒業アルバムなどから引用した。

5 掲載記事

令和2年6月号

創立90周年企画 「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」 第1号

大島郡東方村立古仁屋家政女学校時代（昭和5（1930）年～昭和14（1939）年）

修学旅行は名瀬まで徒歩で！

本校は昭和5（1930）年に大島郡東方村立古仁屋家政学校として誕生しました。入学資格は高等小学校卒業で1年制、定員は50名、古仁屋小学校の校庭西側にありました。時代は世界恐慌（1929～）が波及し日本中が大不況に見舞われ、翌年には満州事変（昭和6（1931）年）が勃発するなど、激動の時代の入口に来ていました。当時の職員の中山ハエ子氏は、「生徒も教師も四年制女学校（現：奄美高校など）の生徒と同じ実力を付けたいという強い意欲に燃えていて、放課後なども遅くまで裁断などを教えました。修学旅行は古仁屋から名瀬まで歩いて行き、途中住用村の西仲間で一泊しました。名瀬についたときはへとへとでした。」



バレーボールを楽しむ生徒たち（昭和8（1933）年）

家政3回卒業生の元田ヨシ子氏は、「自炊や下宿の方も多く、蘇刈・嘉鉄・勝浦・阿木名などの遠いところから山坂道を厭（いと）わず徒歩通学で頑張りとおした方もいた。苦しい窮乏生活を不平不満もなく過ごした時代でした。皆が仲良く真剣に勉強に取り組んでいた姿を忘れることができません。」と記録しています。大不況の中、郷土の学校として歩み始めた頃の、教師・生徒の意欲あふれる姿が目に見えます。（教頭 吉井秀一郎）

<参考・引用文献>

創立50周年記念誌（1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会）、瀬戸内町誌 歴史編（2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会）

令和2年7月号

創立90周年記念 「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」 第2号

鹿児島県古仁屋実科高等女学校の時代（昭和14（1939）年～昭和18（1943）年）

昭和5（1930）年に大島郡東方村立古仁屋家政学校として誕生した本校は、昭和14（1939）年4月10日に鹿児島県古仁屋実科高等女学校として再スタートしました。修業年限を1年から2年へ変更し、教育の充実を目指しました。また、校名は高等女学校令の規定に基づき、実科（家政に関する学科目）だけを置く高等女学校として『実科』の文字を入れたものでした。



古仁屋町立
です！

古仁屋実科高等女学校 第1回卒業記念（昭和15年3月）

第1回卒業記念写真には48名の卒業生が写っており、定員は古仁屋家政女学校時代と同じ50名の、狭き門であったことがわかります。

昭和14（1939）年という年は、日中戦争が泥沼化した上に、5月にはノモンハン事件、9月にヨーロッパで第2次世界大戦が勃発するなど、当時の古仁屋実科高等女学校の生徒にとっても、軍事色に生活が染まりつつある中での新たな船出となりました。

（教頭 吉井秀一郎）

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌（1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会）
瀬戸内町誌 歴史編（2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会）

令和2年8月号

創立90周年記念 「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」 第3号

鹿児島県古仁屋高等女学校の時代（昭和14（1939）年～昭和18（1943）年）

昭和18（1943）年3月に、鹿児島県古仁屋実科高等女学校から校名を変更し、鹿児島県古仁屋高等女学校となりました。当時の生徒の手記には家事や裁縫のほかに公民・数学・生物・国語・漢文などの教科/科目についての記述があり、校名変更により家政に関する教科を中心とした実科高等女学校から、幅広く学ぶ学校へ変化していったことがわかります。戦時であることを反映して（軍事）教練を行い、モールス（信号）、手旗（信号）などについても学んでいました。

また、昭和19（1944）年になると戦況の悪化に伴い、第1回卒業生は3月に卒業すると、北九州の軍需工場へ挺身隊員として動員され、そこでなくなった方も多そうです。在校生も奉仕作業で勉強どころではなく、塹壕掘り（須手）、芋植え（瀬久井）、奄美大島陸軍病院（現：古仁屋中学校）の手伝い、遺骨を骨箱に収める作業、戦死公報のガリ版刷り、発送などに従事していたそうです。（教頭 吉井秀一郎）

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌（1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会）
瀬戸内町誌 歴史編（2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会）

中学生体験入学

お知らせ

日時 令和2年7月31日（金）

13:00～16:15

場所 古仁屋高等学校

在校生挨拶や授業体験（国、社、数、音、商業）、部活動体験を企画しています！



卒業後すぐ軍需工場で働く挺身隊として小倉へ出発されました。



古仁屋高等女学校 第1回卒業記念（昭和19年3月）

創立90周年記念 「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」

第4号

先日、創立90年目の体育祭を開催しました。そこで、昭和15(1940)年の本校の前身、古仁屋実科高等女学校大運動会のモノクロ写真を紹介します。校門には皇紀2600年を記念する数字と、日本が大東亜共栄圏建設などのスローガンに引用した「八紘一宇」(はっこういちう：世界を一つの家にする)の文字が飾り付けられており、太平洋戦争開戦前年の戦時色の強まる学校の様子を垣間見ることが出来ます。ちなみに、映画『永遠の0』で主人公が搭乗していた「零式艦上戦闘機」の「零」とは、この戦闘機が皇紀2600年に海軍に正式採用されたため、末尾数字の零(0)に由来するものでした。(教頭 吉井秀一郎)



※皇紀とは、日本書紀に記された神武天皇が即位したとされる年を元年として定められた紀元で、西暦1940年が皇紀2600年に当たる。
 <参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会)

創立90周年記念 第5号 **新制高等学校へ！**

「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」

古仁屋町実業高等学校から

瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校へ

(昭和22(1947)年～昭和25(1950)年)



昭和22年頃の校舎

戦後間もない昭和22(1947)年に鹿児島県古仁屋高等女学校と古仁屋町立青年学校が合併、古仁屋町実業高等学校が誕生。現在地(奄美大島要塞司令部跡)に移転しましたが、昭和25(1950)年に日本の教育改革に伴い新制高等学校とするか見送るかの激論の末、瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校設立が決まりました。戦後復興最優先の時期、「新制高等学校設立など時期尚早だ!」、「名瀬の高校への進学は負担が大きすぎる。ぜひ地元で新制高等学校設立を!」と意見がまとまらない中、郡宮六氏が「我々は戦争に敗れ日本本土からも切り離され、物心ともにかつて経験したことがない苦しみの中にある。しかし、お互いは三度の食事を二度にしてでも子どもらに高校教育を施すことが我々の義務である。」と演説し、「古仁屋高等学校」設立で決着したそうです。瀬戸内学校組合から鹿児島県へ設置者は変わりましたが、瀬戸内の人々の古仁屋高校への熱き思いは現在も受け継がれています。

(教頭 吉井秀一郎)

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会)
 瀬戸内町誌 歴史編(2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会)

創立90周年記念 第6号

「郷土の高校！古仁屋高校のあゆみ」

鹿児島県立の高校へ！

本校風景(昭和27(1952)年頃)

古仁屋町外四カ村瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校から鹿児島県立古仁屋高等学校へ(昭和28(1953))



昭和24(1949)年4月に「古仁屋町外四カ村瀬戸内学校組合立」の新制高等学校として再スタートした古仁屋高校でしたが、当時の奄美群島は米軍の統治下にあり、設置者も「古仁屋町外四カ村瀬戸内学校組合立(古仁屋町に西方村、実久村、鎮西村、宇検村を加えた組織)」から「臨時北部南西諸島政庁立」、「奄美群島政府立」と変わり、昭和28(1953)年12月25日に悲願の日本復帰が成ると、鹿児島県を設置者とする鹿児島県立古仁屋高等学校が誕生しました。戦後、島民の移動手段が船から自動車へと急速に変化し、現在、宇検村と古仁屋を直接結ぶ公共交通機関はなく、宇検村から通学する生徒もいませんが、日本復帰前は宇検村の皆様も伴に古仁屋高校を支えていたことを記すことといたします。(教頭 吉井秀一郎)

※第5号では瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校設立が決まった年を昭和25(1950)年と記しましたが、正しくは本号のとおり昭和24(1949)年でした。訂正いたします。

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会) 瀬戸内町誌 歴史編(2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会)

令和2年12月号

創立90周年記念 第7号

「郷土の高校!古仁屋高校のあゆみ」

リメンバー古高水産!

鹿児島県立古仁屋高等学校の時代①(昭和28(1953)年)~昭和45(1970)年

現在、古仁屋高校は普通科の高校ですが、鹿児島県立となって以降、昭和29(1954)年に商業科の募集を停止し、別科水産科(2か年制)を併設。昭和30(1955)年には別科家庭技芸科を家政科(3か年制)に移行。昭和31(1956)年に別科水産科を水産科(3か年制)に移行し、普通科を1学級削減。昭和39(1964)に普通科を1学級増やしました。その後、昭和45(1970)年に水産科の募集を停止するまで、各学年、普通科2学級・水産科1学級・家政科1学級の規模を誇る学校でした。昭和31(1956)年度の『経済白書』の序文に書かれて流行語となった「もはや戦後ではない」という言葉に象徴されるように、復興から成長へ舵を切った時代でした。当時、本校も高校卒業後に即戦力として社会で活躍する人材を育てる職業系の学科と、大学などへ進学し、高度経済成長期を科学技術や経済などから支える人材を育てる普通科を併設する高校として歩んでいました。(教頭 吉井秀一郎)



「古高水産と記された浮き輪(昭和29年)」

令和3年1月

創立90周年記念 第8号

強い古高!

「郷土の高校!古仁屋高校のあゆみ」

鹿児島県立古仁屋高等学校の時代②(昭和30(1955)年)

これは昭和30年の全郡高等学校9人制バレーボール大会の覇者!古仁屋高等学校チームの姿です。以後32年まで連覇し、同年県大会「ベスト4」に進出しています。昭和30年代の記録によると、他にも全郡高等学校軟式庭球(現:ソフトテニス)大会での男子優勝など、活躍の記録が残っており、「強い古高」への思いは今も各部で引き継がれています。(教頭 吉井秀一郎)

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会) 瀬戸内町誌 歴史編(2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会)



令和3年2月

創立90周年記念 第9号

「郷土の高校!古仁屋高校のあゆみ」

『デイゴ』に見守られて60有余年!

鹿児島県立古仁屋高等学校の時代③(昭和30(1955)年)~令和3(2021)年

古仁屋高校の正門奥、白く輝く校舎(写真1)は平成14(2002)年に竣工しました。それ以前の校舎は昭和30(1955)年に竣工し、現校舎建築に合わせ、鉄筋コンクリート造りの建物の法的耐用年数(47年)が近づいた時点で役割を終えました。昭和32(1957)年の卒業アルバムの中から、真新しい旧校舎(写真2)の姿を見てみましょう。旧校舎の1階部分には、校門から校庭へ抜ける通路が設けられていたことが分かり、写真の右隅には、本校のシンボルツリー『デイゴ』が若木の姿で写りこんでいます。本校は90周年を迎えた校史を踏まえつつ、『デイゴ』に見守られ、郷土に根を張り、地域に愛される学校としての魅力を高めながら、これからも歩み続けます。(教頭 吉井秀一郎)

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会) 瀬戸内町誌 歴史編(2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会)

卒業記念(1957 古仁屋高校卒業アルバム 名瀬田写真館撮影)



写真1 (旧校舎)



写真2 (旧校舎)

「郷土の高校!古仁屋高校のあゆみ」

これからの歩み「地域みらい留学」

このコーナーでは、古仁屋高校の創立から今日までの歩みを振り返ってきました。なかでも、本校は昭和5(1930)年に大島郡東方村立古仁屋家政学校として誕生し、古仁屋小学校の校庭西側に所在していたこと。昭和19(1944)年3月、鹿児島県古仁屋高等女学校(校名変更あり)第1回卒業生は卒業後すぐに北九州の軍需工場へ挺身隊員として動員され、そこで亡くなった方が多く、在校生も塹壕掘り(須手)、芋植え(瀬久井)、奄美大島陸軍病院(現:古仁屋中学校)の手伝いなどに従事していたこと。昭和25(1950)年、戦後復興最優先の時期に「新制高等学校設立など時期尚早だ!」、「名瀬の高校への進学は負担が大きすぎる。ぜひ地元の新制高等学校設立を!」と激論の末、「新制古仁屋高等学校」設立で決着したこと。これらは風化させてはならない郷土の記憶です。瀬戸内学校組合から鹿児島県へ設置者は変わりましたが、瀬戸内の人々が設置し、育ててきた本校に対する思いは現在も受け継がれています。

現在、本校は瀬戸内町と連携し、一般財団法人「地域魅力化プラットフォーム」の行う「地域みらい留学」(日本各地域にある魅力的な学校に入学し、充実した高校生活をおくること。豊かな自然、ココでしかできない体験、少人数教育など都道府県の枠を超えて挑戦できる取組)に参加しており、全国に向けて本格的に入学の門を開いている県立高校3校の中の1校です。参加3年目の今年は、留学生と地域との交流もさらに深まり、寮が所在する清水地区以外でも瀬戸内町出身の生徒とともに地域行事の維持及び活性化に貢献しています。このように、古仁屋高校の「これからの歩み」は地域の皆様と手を取り合いながら一歩ずつ前へ進んでいます。(教頭 吉井秀一郎)

<参考・引用文献> 創立50周年記念誌(1981年 鹿児島県立古仁屋高等学校創立五十周年記念事業実行委員会)
瀬戸内町誌 歴史編(2007年 瀬戸内町誌歴史編編集委員会)

6 おわりに

今回、この企画を立ち上げて、改めて本校の歴史を振り返ってみることで、瀬戸内の人々が設置(本土復帰後は鹿児島県)し、育て、支えてきた学校であることが分かった。この歩みこそが、現在も郷土の高校として、強い期待が寄せられ、熱い眼差しが注がれ続ける源であることに気付かされた。

そして、『古高だより』を読んだ在校生及び卒業生が校史に誇りを持ち、地域の児童・生徒・保護者から「行きたい・行かせたい」と選ばれる学校として飛躍できるよう取り組んでいきたい。